# 『解放されたエルサレム』第七歌の日本語全訳

## A translation in Japanese of the Canto 7 of the *Gerusalemme liberata*

水　野　留　規
MIZUNO, Ruki

This is a translation in Japanese of the Canto 7 of Torquato Tasso's epic poem of the First Crusade, *Gerusalemme liberate* (1981). At the beginning of the Canto 7, Erminia arrives by the river Jordan, where she finds refuge in a house of a shepherd. Tancredi who follows Erminia thinking her Clorinda loses her trail. He meets Rambaldo, one of the Christian soldiers who followed Armida in the Canto 5, and is caught in a trap laid by Armida. While he is imprisoned in the castle of Armida, the day comes when Tancredi must fight against Argante, one of the two heros of the Islam side along with Clorinda. Raimondo becomes Tancredi's substitute. Protected by an angel, Raimondo almost defeats Argante, but a demon interrupts the combat, destroying the rule of the chivalry. The Crusaders enter in the battle field and the terrible struggle between both sides continues until a terrible storm arisen by the Hell drives the Crusaders to their tents.

キーワード：　タッソ Tasso、エルサレム Gerusalemme、叙事詩 epic

第七歌訳[1]（〔　〕は訳者筆、原文はイタリア語韻文、各節八行から成る）

〔一〕その間エルミーニャは馬の導きのままに原始の森の木々が影をつくっている場所へと入っていた、震える自らの手で手綱を操ることもできず、生きているか死んでいるか分からないような呈で。馬はかのじょを好きなように連れまわし、あちらこちらの道らしきところを駆け巡ったので、かのじょの姿はついに追手たちの視界から消えて、その跡を追うことはかれらにとっていまや徒労と帰した。

〔二〕獲物が広々とした野から森へと逃げ込んだがためにその足跡を見失ってしまい、苛酷で長い狩猟のあとに息をはずませながら哀れな表情で戻ってきた猟犬たちのように、キリスト教軍の兵士たちは怒りと恥じらいを露わにして、疲れ果てて去っていった。しかし、怖れおののき、狼狽したエルミーニャは、逃げることに精一杯で、追手たち

が気掛かりであったものの、後ろを振り向くことさえなかった。

〔三〕一晩中、そして一日中逃げ回り、目指す場所もなく、案内してくれる者もいなかった。自らの目から溢れる涙と自らが発する嘆き声以外には、周囲の何かを見たり、聞いたりすることもなかった。だが、太陽がその飾られた馬車から駿馬を解き放ち、海の中へと籠る時間になったとき、きらめく水をたたえる美しいヨルダン河の畔（ほとり）に着き、その岸辺で馬から下りると、そこで横たわった。

〔四〕何も食べ物を口にせず、ただ自らの不幸を糧とし、ただ涙を渇きの癒しとした。だが、命ある哀れな者たちに安らぎと静寂とを与え甘い忘却へと向かわせる眠りが、かのじょを（その意識を朦朧とさせて）苦しみから解き放ち、静謐で寡黙な翼を広げて包みこむ。しかし愛神はかのじょにさまざまな夢を送り込み、その静かな眠りを掻き乱そうとする。

〔五〕陽気な鳥たちがさえずり、曙の光が挨拶をして、川や木立ちがざわめき、風が波や花々と戯れる、そうした音を聞くまで目を覚まさなかった。疲れた眼を開けると、牧人たちの住処がひっそりと佇（たたず）んでいることに気がついた。水と木々の枝の間から声が聞こえてくるように思われたが、それは自らを再び溜息と涙へと誘うような声だった。

〔六〕そのため涙ぐむのであったが、牧人たちの声と思われ、事実そうであった歌声と素朴な木笛の音が混じった甘美な音が聞こえてきたので、嘆くのをやめた。起き上がり、音がするほうへゆっくりとした足取りで向い、心地よい木陰に白髪の老人がいるのを認めたが、その老人は羊の群れの傍らで籐を編みながら三人の息子たちの歌声に耳を傾けていた。

〔七〕牧人たちは普段あまり見ることがない武者が突然現れたので仰天したが、エルミーニャはかれらに挨拶し、やさしい言葉を投げかけてかれらを安心させ、面頬を上げて眼を見せ、兜を取り美しい金髪を見せると、言った。「続けてください、天に愛でられた幸いなる人々よ、その羨まれるべき仕事を。この武器があなた方の作業や、あなた方の甘美な歌をかき乱すことはけっしてありません。」

〔八〕そして続けた、「おお、爺よ、いまや周囲の町は恐ろしい戦火を浴びて燃えているというのに、あなた方が戦争の被害を恐れることなく、ここで静かに暮らすことができるのは、どうしてなのですか。」「息子よ」、牧人は答えた、「私の家族と群の動物たちはこの地で今までいかなる被害や辱めも受けたことがありません。戦場から遠く離れたこの地には武者たちの雄叫びも届かないのです。

〔九〕ああ願わくば、天の計らいにより、悪意なき牧人の質素な暮らしが守られ、称えられんことを。雷が低く平坦な場所ではなく、そびえ立つ山の頂に落ちるように、異境の武人たちの怒りがもっぱら高慢な王たちの頭に向けられんことを。貪欲な兵士たちが、卑しく、蔑まされた私たちの僅かの財を略奪しようとすることがないことを。

〔十〕貧しさを人々は卑下し、蔑みますが、私は非常に大切し、財宝や権力を得ようとはしないのです。この私の静かな心に、貪欲で野心的な関心や願いが生じたことはありません。私の喉の渇きを癒してくれるこの清らかな水に毒が混ざっているなどと私は思ったことがありませんし、これらの家畜や菜園が私の貧しい食卓に必要なものを与えてくれるので、食べ物を買い求めることもないのです。

〔十一〕私たちは生活を営むために多くを望まないのであり、多くを

必要とすることもないのです。こちらにいるのは、私の息子達です。かれらが家畜の群れを管理するので、私は人を雇う必要がありません。この囲われた孤独な土地で、細い脚で跳びまわる山羊や鹿を、この川に棲むぴちぴちとした魚を、空に向って翼を羽ばたかせる小鳥を見ながら私は暮らしているのです。

〔十二〕人は若い時に幻想を抱くものですが、私もまた若い時、ほかの望みを抱いて、家畜の世話に嫌気がさしたことがありました。生まれた土地から逃避して、メンフィ[二]にしばらく滞在して、王宮のなかで役人たちに囲まれて働きました。私は菜園の管理者でしたが宮廷の現実を目の当たりにし、その邪悪さに気づいたのです。

〔十三〕出世を約束する言葉に期待を抱き、長い間、耐えがたきことに耐えましたが、それから年齢を重ねるにつれて希望を失い、大胆な野心も抱かなくなり、この慎ましい生活がもたらす安らぎを希求するに至って、言ったのです、宮廷よ、さらば、と。こうして私は森の友人たちのもとに戻り、幸せな日々を送るようになりました。」

〔十四〕牧人の男がこのように話している間、エルミーニャはその軽やかな口元を黙って一心に見入っていた。牧人の示唆に富んだ話はかのじょの心に深く入り込み、その心の動揺を幾分なりとも和らげた。つらつらと考えたのち、自らのエルサレム帰還が運命の導きによって可能となるせめてその時まで、この隔離された秘境の地に留まることを決心した。

〔十五〕そして善良なる老人に向って言った、「おお、幸いな方よ、あなたはかつて身をもって悪を知ったということですが、あなたのかくも恵まれた状態が天の御意であるならば、哀れな私にどうか慈悲をかけてください。あなたと暮らすことを希(こいねが)うこの私を、あなたの幸いなる宿にぜひとも受け入れてください。そうすれば私の心はこの木陰に憩い、地上的な苦悩から少しは解放されるでしょう。

〔十六〕俗人が神像のごとく敬愛する宝石や金をもしあなたが欲するならば、それらを私はまだ所持しているので、その願いを十分に叶えて差し上げましょう。」そう言うと、美しい水晶のごとき苦しみの涙を愛らしい眼から流しつつ自らの不幸の一部を語ったが、それを聞いていた憐み深い牧人はかのじょの涙を見て同じように涙を流した。

〔十七〕牧人は続いてエルミーニャを優しく慰め、愛情で体を火照らせた父親のようにかのじょを迎え入れると、天から授かった相思相愛の絆で結ばれ、今では年老いた妻のところへ連れて行った。王家の少女は簡素な作業着を着て、頭を荒い布地のスカーフで覆ったが、人々はその手足や目の動かし方を見て、かのじょが森に暮らす女でないことを悟った。

〔十八〕粗末な衣服によって、かのじょの高貴な輝きや生来の威厳と気品が包み隠されることはなかった。王家の者に漂う風格を、かのじょは苛酷な作業のうちにも保持していた。家畜の群れを牧場に連れて行き、棒切れを使って連れ戻し、牧舎に入れた。毛深い乳房から乳を搾って、丸い型の中で押し固めた。

〔十九〕夏の太陽のもとで羊たちが木蔭で体を伸ばして横たわっているとき、ブナの木や月桂樹の樹皮に、しばしば愛する男の名を多種多様な方法で書きつけた[三]。不幸で、波瀾万丈の恋の苦い体験を多くの木々に彫り込むと、その自らが綴った文章を読みなおして、頬を美しい涙で濡らした。

〔二十〕そして泣きながら言った、「友なる木々よ、この悲しい恋の記録を大切に保管し給え。そうすれば――いつの日かお前たちの作る爽やかな木蔭にやって来るかもしれない――愛神の信奉者が私に降りかかった幾多もの不幸を知って優しい慈悲の念を心に呼び起すであろうから。そして言うであろうから、ああ、運命の女神と愛神は、忠実な下僕にあまりにもひどい報いを与えた、と。

〔二十一〕もし情け深い天が人間の真摯な祈りに耳を傾け給うならば、きっと起きるでしょう、いつの日かこの森に、いまは私のことに全く関心をもっていないかの男〔タンクレーディ〕がやってきて、か弱く、虚弱な私が埋められている場所を見て、少しの涙を流し、溜息をついて、私の苦しみに対する遅れながらの謝罪をするということが。

〔二十二〕そうなれば、現世でわが心は惨めであったけれども、私の死後にわが魂は幸いに包まれるでしょう。冷たい灰よ、楽しむのです、いまの私には楽しむことが許されていないかの男の炎を。」物言わぬ幹に向ってこう言ったが、その美しい二つの眼からは悲しみの涙があふれ出した。タンクレーディはその頃、エルミーニャがいるところから遠く離れた場所でかのじょを追い、運命の導きのままに彷徨っていた。

〔二十三〕残された馬の足跡を手掛かりに、近くの森の中へと入って行った。だが、繁茂した不気味な木々が暗く濃い影を地面に落していたので、新しい足跡を選り分けることができなくなって、困惑しつつも先へと進んだ。周囲の物音にも注意をはらい、蹄（ひづめ）の音や武器の音が聞こえないか耳を澄ました。

〔二十四〕ニレの木やブナの木の柔らかな葉が夜の微風に少しでもざわめいたならば、あるいは動物や鳥が枝を揺らせたならば、ただちにその小さな音がしたほうに進んだ。長らくして森から抜け出ることができたが、月明かりに導かれてどこへ通じるか分からない道へと入っていくと、その道のずっと先の方から音が聞こえてきたので、その音が発せられた方へ向かった。

〔二十五〕行き着いた場所では、清らかに輝く水が岩の間から大量に湧き出ていた。その水は小川となって、緑の岸辺の間をさらさらと音を立てて下の方へ流れ出ていた。失意のタンクレーディはその場所で立ち止まり、〔クロリンダを〕呼んだが、谺だけがその声に答えた。やがて白と朱に染まった夜明けの光が晴れやかな空に広がるのを目にした。

〔二十六〕苛立って唸るような声を出し、天命により自らの切なる願いが叶わなかったことを嘆いた。しかし想いを寄せる女性に危害を加える者がいたならば、その者に対して報復することを誓った。そしてついに、帰路は定かでなかったが、キリスト教軍陣営に戻る決心をした。エジプトの騎士〔アルガンテ〕との戦いの日が迫っていることを思い出したからである[四]。

〔二十七〕帰途につき、知らない道を進んでいったが、その時、自らの方へ勢いよく駆けてくる一頭の馬の足音を聞いた。続いて狭い谷間から一人の男が飛び出してくるのを見たが、その男は遣いの者であるように思われた。男はわれわれの〔十字軍の〕遣いの者がするように、しなやかな皮紐を振り回し、角笛を肩から横腹にかけて提げていた。タンクレーディは男に向って、どの道を通ればその場所からキリスト教軍の陣営に行けるか尋ねた。

〔二十八〕男はイタリア語で答えた、「私もそこへ向かっている、私はボエモンド[五]が送った急使だ。」タンクレーディは男の後を進んだが、それはこの男を叔父の使者と思い、男の偽りの言葉を信じたからである。二人は不潔で有害な湖が沼と化して、城を取り囲んでいるところへ着いたが、そのとき太陽は夜が宿っている広大な海原へ沈もうとしているかのようであった。

〔二十九〕遣いの男は城のところに着くと角笛を吹いた。跳ね橋が直ちに降りてくると、ダンテク―レディに言った。「あなたがイタリア人であるならば、再び太陽が昇るときまで、ここに滞在することができます。この城はコセンツァの伯爵が異教徒から奪ってからまだ三日と経っておりません。」タンクレーディは周囲を見回したが、城は立地と防備故に、どこから攻められても落ちないように思われた。

〔三十〕あまりにも完全な城であるが故に、何か謀略が隠されているのではないかと少し疑ったが、落命の危険に晒されることには慣れているので、そのことについては一言も触れず、素振りにも見せなかった。それは自らの判断や運命がいかなる場所に自らを導いても、自らの武勇によって身を守るという気概の現われでもあった。また、かの決闘に臨まなければならないという事情もあって、新たな冒険をここでしようとは思わなかった。

〔三十一〕そのため、城の正面のところに広がり、アーチ状の跳ね橋の先端が延びている野原に来ても、進む速度を少し落としただけで、怪しげな従者に招かれようとも、その誘いには応じなかった。すると橋の上に、恐ろしい怒りの表情をした一人の武具を付けた騎士が現れたが、その騎士は手に鞘から抜かれた剣を持ち、脅すような荒々しい口調で言った。

〔三十二〕「運命によってか、自らの意志によってか、アルミーダが治める破滅の国へ到達したおまえ。逃げようとしても無駄だ。武器を置いて、この縄に手を委ねて捕虜となるのだ。おまえが入らなければならないこの監視された入口の扉には、婦人がすべての者に課した掟が書かれている。これから先、何年経っても、髪の毛が白くなっても、空を再び仰ごうなどと思うなよ[六]。

〔三十三〕ただし、おまえが婦人の手下たちと共に、キリスト教軍の兵士たちに対抗することを誓うなら話は別だ。」タンクレーディはこのように話す男をじっと見つめたが、男の武具には見覚えがあり、男の声も聞いたことがあると思った。この者はグアスコーニャのランバルドであり、アルミーダを追って出発し[七]、アルミーダのために異教徒となり、この地で定められた邪悪な掟の擁護者となった男であった。

〔三十四〕敬虔なる戦士は正義の義憤に駆られて顔を真っ赤にして答えた、「呪われた裏切り者め、私はかのタンクレーディであり、キリストのためにいかなる時も剣を握り、キリストの戦士の一人であり、キリストの支援のもとその敵を征した。こうしたことはおまえも知っているだろう。私が手にする剣は怒りの神が、おまえに対する復讐を果たすために選ばれ給うた。」

〔三十五〕邪悪な戦士は輝かしい名前を聞いて動揺し、顔色を曇らせたが、怖れを隠して言った、「哀れな者よ、おまえは何故に死を迎えることになるこの地に来たのか。ここでおまえは気力を失い、行動を制御され、おまえのその高慢な頭も切り落とされる。おれはそのおまえの頭をフランク人の首領たちに送ってやろう、今日の俺はかつての

俺と変わっていないのだから。」

〔三十六〕異教徒の男はこう言った。そのとき昼の光はすでに去り、ほとんど見えなくなっていたので、多くの明かりが周囲には灯り、それによって大気は明るさと静けさを帯びていた。城は輝き、さながら夜の祝祭のときに飾られた劇場内に設けられる豪華なステージのようであった。城の高いところにアルミーダは坐って、見て、聞いていたが、かのじょの姿は他の者たちに見えないようになっていた。

〔三十七〕そのとき気高き男〔タンクレーディ〕は苛烈な決闘に備えて武器を用意し、心の準備をしていた。敵である男〔ランバルド〕が徒歩で迫ってくるのを見て、旅で疲れた馬から降りた。〔ランバルドは〕盾の後ろに身を隠し、兜をかぶり、剣を鞘から抜いて、攻撃を仕掛けようとした。闘志満々の王子はそれに対抗して、険しい目つきで、恐ろしい声を上げた。

〔三十八〕ランバルドは相手の周囲に歩みを進め、構えると、切りかかるような動作をして、相手を欺こうとした。タンクレーディは手足を負傷し、疲れていたが八、果敢に攻めて、相手との距離を縮め、相手に迫ろうとした。相手が後ろに退くと、すばやくそこへ飛び込んで、歩を進め、相手を追い詰め、稲妻のような剣を何度も相手の面頬に向けた。

〔三十九〕そして体の他の部分よりも生命に関わる部分を激しく攻め立て、攻撃に際しては挑発的な脅しの言葉を添え、相手が恐怖を抱いてひるんだ隙に傷を与えようとした。身軽なグアスコーニャの男〔ランバルド〕はあちらこちらに体を動かし、手足を素早く動かして攻撃をかわした。或る時は盾で、或る時は剣で、タンクレーディの怒りをから回りさせようとした。

〔四十〕だが、ランバルドは相手が次の攻撃に移れないほど素早く身をかわしていたのではなかった。すでにかれの盾は折れ、兜は砕け、鎧には穴があき、血が付いていた。タンクレーディに少しでも傷を負わせるような攻撃を、かれのほうから仕掛けるということもなかった。かれは恐れを感じ、かれの心は怒り、恥、自覚、愛によって引き裂かれていた。

〔四十一〕ついにかれは決死の攻撃を仕掛けて、最後の運に賭ける決心をした。盾を投げ捨て、まだ相手の血が付いていない剣を両手で握り、敵に近づいて体を押し付け、剣を振り落とした。その一撃から身を守る銅版は〔タンクレーディの鎧に〕付いていなかったので、タンクレーディは相手の剣を受けた左の太股に大きな痛みを感じた。

〔四十二〕そしてタンクレーディの広い額にも一撃を加え、その一撃は鐘の音のように鳴り響いた。それによって兜が割れることはなかったが、強烈な打撃を受けたタンクレーディはうずくまって、よろめいた。王子〔タンクレーディ〕は頬を怒りで真っ赤にして、その眼は炎と火花を発した。兜の面頬からは燃えるような視線が、歯ぎしりの音とともに噴き出していた。

〔四十三〕異教徒となった裏切り者〔ランバルド〕はかくも恐ろしい表情を見ることさえ、もはやできなかった。タンクレーディの剣がひゅーひゅーと音を立てるのを聞き、その剣が己の血管や胸の中に突き刺さっているように思った。タンクレーディの剣はランバルドを敗走させ、橋を支える石柱を直撃する。破片と火花が空中に飛び散り、裏切り者の心には悪寒が走る。

〔四十四〕ランバルドは橋のほうに逃れ、逃げること以外に助かる道がないことを自覚した。だが、タンクレーディはランバルドを追いかけ、その背中に手が届くところまで迫ったとき、見よ、（それは逃げている者にとっては天の助けであった）明かりが消え、それと同時に星々も光を放たなくなり、月の光も真っ暗な空のもとで光を失った夜をまったく照らさなくなった。

〔四十五〕夜の闇と魔術とに妨害されて、優位にあった者は追跡を断念し、相手の姿も見失い、自分の横や前に何があるかも分からなくなったので、恐る恐る、不確かな足取りで進んだ。扉のところに来てよくわからぬままに敷居を偶然またぎ、中に入ったことにも気づかなかったのであったが、扉が後ろで音を立てて閉まったのを聞いて、暗い場所に閉じ込められことを知った。

〔四十六〕われわれの海が沼と化すコマッキオの入江のあたりに棲む魚が、避難することができる静かな水を求めて荒々しく残酷な波から逃れると、自らを沼の監獄に閉じ込めてしまい、（その柵は驚くべき仕掛けによって入ってくる魚にはつねに開いているが、出ようとする魚を外に出さないので）もう後戻りできなくなることがあるように、

〔四十七〕タンクレーディは、この奇怪な監獄の仕掛けや策略がどのようなものであったにせよ、自らそこに入って、閉じ込められたことにあとで気づいたのであったが、いかなる者も独力でそこから出ることはできなかった。力持ちのかれは扉を揺すってみたが、無駄に労力を使うだけであった。その時、声がした、「出ようとしても無駄だ、アルミーダの捕虜となった者よ。

〔四十八〕この場所でおまえは（死を恐れる必要はないが）生きた者たちの墓に入って、歳月を過ごすのだ。」このような声に対して、強い戦士は答えなかった。心の奥底にかれは苦悶の声を閉じ込めていたのであり、愛神や運命、自らの愚かさや他者による残酷な計略を呪う言葉を自らに向って吐き、声にならない声で次のようにも言った、「陽の光を失ったことは大した損失ではないだろう、

〔四十九〕もっと愛らしい太陽の、もっと甘美な姿を哀れな私は失おうとしているのだ。私の不幸な魂が愛の光を浴びて安らぎを得る場所に戻ることができるか否かも定かではない。」そしてアルガンテのことを思い出して、いっそう悲しむ。「私が自らの義務を果たさなかったことは重大だ。かれが私を軽蔑し、嘲笑したとしても、それは当然のこと。ああ、わが罪はあまりにも重く、わが不名誉は決して消えない。」

〔五十〕かくして愛と名誉が戦士を不安に陥れ、その生気をじわじわと侵食していく。さて、タンクレーディが苦悶していたとき、熱血漢アルガンテも羽根布団に横たわる苦痛に耐えていた。その粗削りな心の中でかれは平和への憎悪と、殺戮への期待と、名誉への愛を膨らませていたので、傷はまだ治っていなかったが、夜明けとともに「六日目の朝」が巡りくることを願っていた。

〔五十一〕その前日の夜、血気に逸るイスラムの男はほんの少しだけ休むために床に就いただけで、山の頂を照らす陽光が黒い空に現れないうちに起き上がり、従者に向かって叫んだ。「武具を持って来い。」従者は武具を用意して、手渡したが、その武具はアルガンテがいつも身に付ける武具ではなく、〔アラディーノ〕王から贈られた、価値ある武具であった。

〔五十二〕アルガンテは武具自体に関心を示すことなくそれを付け、そのかなりの重みを物ともしないようだった。普段使う剣を腰に提げたが、それは見事な焼きが入れられ、幾多もの戦いで練磨された剣であった。乾いた大気の中を彗星が――その不吉な光は血の色で染まった暴君たちの目に自らの支配の終結や恐ろしい病気の到来に映ったのであったが――不気味な血の色をした頭髪のような尾を従えて輝くように、

〔五十三〕武具を付けたアルガンテは燃えるように見え、斜視にゆがんだ眼は血と怒りに酔っているようだった。力が漲った動きは死をも呼び起こすようで、顔は死の到来を感じさせるものだった。その姿を一瞬たりとも見て、恐怖を感じなかったと言えるほど冷静で、剛毅な者がいるであろうか。剣を鞘から抜き、高く持ち上げて、雄叫びをあげて振り回し、空中で大気や影を切って見せた。

〔五十四〕「かのキリスト教軍の盗人は不遜にも俺に挑んできたが、いまに血まみれにして地面に投げ倒し、乱れた髪を泥まみれにしてやる。奴の息があるうちに奴の武器をこの手で奪ってやり、奴が崇める神も侮辱してやろう。奴は死ぬ時になって自分の遺骸を犬の餌に与えないように懇願するだろうが、そんな願いも俺は拒んでやる。」

〔五十五〕他の雄牛に嫉妬する雄牛は敵から強い刺激を受けて苛立ち、激しく鳴いて、その鳴き声で自らの本性である獰猛さを呼び起こし、角を研ぐために木の幹にそれを擦りつけ、風に決闘を挑むかのように虚しく突進を繰り返し、足で砂ぼこりを起こし、離れた所から敵を死闘へと招く、そういう雄牛にアルガンテの姿はそっくりであった。

〔五十六〕まさに狂気に突き動かされたように、アルガンテは決闘の審判者を呼び、吐き捨てるように言った。「キリスト教軍の幕営へ行って、奴らが決闘者として送り出す者に言え、この決闘には情けがないと。」それから逡巡することなく馬に跨り、囚われていた者を自らの前に引き連れてエルサレムの町から外に出ると、丘を猛烈な勢いで駆け降りて決闘場へ向かった。

〔五十七〕そのとき角笛が吹かれ、その音は不気味な響きを伴って周囲に拡散し、人々を狼狽させる雷鳴のように、聞いた者たちの耳をつんざき、心に衝撃を与えた。キリスト教軍武将たちはすでに最も大きな幕営に集まっていた。審判者はかれらにアルガンテの挑戦を伝え、最初に〔対抗者として〕タンクレーディの名を挙げたが、他の者の名もその後で挙げた。

〔五十八〕武将たちを見るゴッフレードの眼差しは真剣で落ち着いていたが、かれは迷い、決めかねていた。どれほど考えても、どれほど見渡しても、決闘者としてふさわしい者はいないように思われた。キリスト教軍の華である強者（つよもの）たちはその場にいなかった。タンクレーディについては新たな情報を欠き、ボエモンドは遠方の地にいて、無敵の英雄はジェルナンドを殺したために軍から追放されていた[九]。

〔五十九〕籤によって選ばれた十人以外に、軍の中で最も秀抜で、高名な武将達が夜の闇に身を隠してアルミーダの偽りの警護隊に加わっていた。技量において劣り、勇気に欠ける残りの者たちは気おくれして、発言しようとしなかった。かくも大きな危険を冒してまで栄誉を求めようと、恥よりも恐れに囚われたかれらが思うはずもなかった。

〔六十〕かれらの沈黙、表情、あらゆる身ぶりに接して、司令官はかれらの内に恐れがあることに気づいた。寛容と侮辱の念が込み上げて

くるのを感じ、突然その場で立ち上がると、言った。「私がわが身を危険に晒すことを拒み、それによって一人の異教徒がわれらの名誉をかくも下劣にも踏みにじるならば、私は生きるに値しないだろう。

〔六十一〕わが軍勢よ、座って、安全な場所でくつろいで、私が危険に立ち向かう姿を見るがよい。さあ、私に武具を付けてくれ。」ゴッフレードがそう言うと、即座に武具がかれに届けられた。しかし善良なるライモンドがそのとき進み出る。この男は壮年に達していたが、思慮深く、その場にいた者たちに劣らず若々しい気力を保持していた。

〔六十二〕かれは言った、「ああ、全軍の命運をひとりの統率者が担うことがないことを。あなたは指揮官であり、一介の兵士ではないのです。あなたの葬儀は私的なものではなく、公的な式典になりましょう。信仰と聖なる国家を司るのはあなたであり、バビロンの帝国[十]を破滅へと導くのもあなたなのです。あなたは理性を働かせ、命令を下せばいいのです。勇ましく戦わないといけないのは他の者なのです。

〔六十三〕私は年齢の故に歩くときも背中が曲がっておりますが、この役目を引き受けることに吝かではありません。他の者たちに戦いの任務を負わせないでください。私の年齢は私を除外するという理由にはなりません。ああ、わが身に闘志が漲っていたあの頃に戻ることができるなら、ここで怖れながら心を閉じている君たちの年齢に。君たちは怒り、恥じないのか、あの男から挑発と侮辱を受けているというのに。

〔六十四〕ああ、かつての私に戻ることができるなら、コッラード二世の偉大な宮廷で、全ドイツの注目を浴びる中、忌まわしいレオパルドの胸を切り開き、死を奴に与えた、あのときの私に[十一]。かくも強い男の戦利品を奪うという行為は、いまここで一人の丸腰の者が敵の下劣な軍勢を敗走させるよりも、はるかに輝かしい武勲の証になった。

〔六十五〕もし私にあの闘志が、あの熱い血があったなら、あの尊大な男の高慢の鼻を折ってやっただろう。私はどのような身になっても、つねに強い心を失わないし、老いたとしても臆病にはならない。もし決闘の場で血にまみれて倒れたとしても、異教徒の決闘者は勝利に満足しないだろう。さあ、私は武具を付けよう。今日の日が私のこれまでのあらゆる偉業を新たな栄誉で飾る日とならんことを。」

〔六十六〕老練な武将はこのように述べた。かれの言葉は他の武将たちを鼓舞し、かれらの気力を回復させた。先ほどまで怯えて無言であった者たちの口から勇ましい言葉が次々と飛び出した。もう決闘を拒む者はいなくなり、それどころか多くの者が競って決闘者となることを志願した。バルドヴィーノが、ルッジェーロとグエルフォが、二人のグイドが、ステーファノが、ジェルニエーロが、

〔六十七〕策略でもってアンティオーキア攻略の機会をボエモンドに与えたピッロが、名乗りを上げた。海によってわれらの陸から切り離された土地からやってきたスコットランドのエベラルド、アイルランドのリドルフォ、ブリテン人の勇士ロズモンドも、争い合って志願した。そして睦まじい夫婦であるグリッペとオドアルドも他の者たちと同じように決闘者となろうとした。

〔六十八〕だが、他の誰よりも貪欲かつ熱心に志願したのは勇ましき翁であった。かれはすでに武具を身につけ、欠けているのは鍛えられた鋼鉄の兜のみであった。そのライモンドに向かってゴッフレードが言う。「おお、古の武勇の生き鏡である者よ、願わくば、わが軍勢が

そなたに見習い、それによって闘志を得んことを。そなたの内には軍神によって授けられた栄誉と手本と術が輝いているのだから。

〔六十九〕ああ、若い武将たちの中にそなたのように勇ましい者を十人見出すことができるならば、私は尊大なバビロンの国を打倒し、十字架の旗をバットロ河からティーレ島まで[十二]立てることを切に望む。だが、いまは譲歩せよ。私は願う、もっと重要で、長老にふさわしい任務をそなたが請け負うことを。すべての者の名前が書かれた紙を壺の中に入れて、われらの慣習に従い、判断を偶然に委ねよ。

〔七十〕否、神の判断に委ねよ。運命や宿命は神の命令に従う神の下僕であるのだから。」だが、ライモンドの気持ちは変わらず、かれは自らの名前が紙片に書かれることを望んだ。ゴッフレードは兜をすべての紙片で満たすと、兜を揺り動かして紙片を混ぜ、そこから最初の紙片を引き出して、書かれている名前がトローザの伯爵〔ライモンド〕であることを告げた。

〔七十一〕かれの名前を皆は歓喜でもって受け入れ、籤の結果を嘆こうとする者はいなかった。ライモンドの額と顔が若々しい活力で充ち溢れる。かれ自身が若返る様は、まさに新しい皮に身を包んだ恐ろしい蛇が金色に輝き、陽の光に対して体を伸ばすようであった。だが他の誰よりもゴッフレードがかれに拍手を贈り、勝利を祈念して、かれを称えた。

〔七十二〕そして剣を腰から取るとそれをライモンドに手渡して言った。「これはサッソーニアの反逆児だった勇者が戦で使っていて、私が奴から奪い取った剣だ。私は多くの邪悪な罪で汚れていた奴の命もそのときに奪った。それ以来いつも私と共に勝利してきたこの剣をそなたに贈ろう、そなたと共にあっても、この剣が幸いであることを願って。」

〔七十三〕その頃、かの高慢な男はキリスト教軍の対応の遅さに痺れを切らして、脅すような声で叫んだ。「おお、無敵の者たちよ、ヨーロッパの好戦的な軍勢よ、おまえたちに挑んでいるのは俺一人だぞ。そろそろタンクレーディを出したらどうだ、奴はなかなかの強者と見たが、自信を失ったのか？それとも羽根布団にくるまって、この前の決闘で奴を救った夜が来るのを待とうとしているのか？

〔七十四〕他の者でもいいのだぞ、もし奴が怖気づいたなら。集団を組んで来てもいいぞ、騎士たちよ、歩兵たちよ。俺と一対一で決闘することができる奴は千人に一人もいないのだから。あそこを見よ、マリーアの息子が眠っている墳墓だ。あそこへ行って、誓願を達成してはどうだ。こちらの道から行けるぞ。おまえたちが剣を出し惜しんでいる理由が他にあるのか？」

〔七十五〕このような相手を愚弄する言葉で、残忍なサラセンの男はキリスト教軍をあたかも鞭打つように非難した。それを聞いたキリスト教徒の中でも激怒したのはライモンドであり、侮辱に耐えることができなかった。刺激を受けたかれの闘争心が燃え上がり、怒りを研ぎ石にして鋭さを増す。動きの遅い者たちを押しのけて、その俊足ゆえに「北風」と名付けられた愛馬に跨り突進する。

〔七十六〕この馬はタゴ河の畔で生まれ、そこには軍馬となるロバを産む馬たちがしばしば群れているが、これらの馬は万物を恋へと誘う魂の季節になると心に宿っている本能を刺激され、そよ風に向かって口を開いて豊饒なる風から種を得ようとする。そして暖かな吐息に

よって、驚くべきことにも、母性に目覚めた馬は子を宿し、産み落とす。

〔七十七〕この「北風」が天から吹く風のうちで最も軽い風、まさに北風から生まれたのは尤もだと人は言うだろう、「北風」が砂地に足跡が残らないほど早く疾走するのを見るならば、あるいは軽やかに、そして早く、左右に跳躍を繰り返すのを見るならば。そんな駿馬に乗ってライモンド伯爵は戦いへ向かい、天を見て言う。

〔七十八〕「主よ、あなたは邪悪なゴリアテを倒すべく、テレビントの谷にいた未熟なダヴィデに投石器を与え給うて、ヘブライ人たちの虐殺者ゴリアテが少年の最初の石で死ぬようにされ給うた[十三]。そのときと同じように、今こそはあの無法者が私の一撃を受けて倒れるように計らい給え。先にか弱き少年が高慢な敵を打ち負かしたように、今こそは虚弱な老人を傲慢の征伐者とされ給え。」

〔七十九〕伯爵はこのように述べたが、その願いは成就への強い期待に動かされ、空へ向かって上昇する性質を持っている炎のごとく、天上へと飛翔し、昇って行った。永遠なる神はその願いを受け止めると、自らの軍勢の中から一人の天使を選び、邪悪な男の手から伯爵を守り、無傷の勝利へと導くよう命じた。

〔八十〕善きライモンドがこの世に生を受け、旅を始めた最初の日から、神慮により、まだ赤子であったかれの擁護者に選ばれた天使は、いま再び天上の王である方からかれの擁護者に任命されたので、天の軍勢が保有する全ての武器の保管庫となっている天の城塞に昇った。

〔八十一〕そこには〔天使が〕蛇を征伐したときに使った槍、〔神が落とし給う〕強烈な雷電の矢、恐ろしい疫病や他の病気を世にまき散らし人の目には見えない矢などが保管されている。そして高所には大きな三叉の鉾が吊ってあり、それは広大な大地の土台を揺すり、都市を破壊するために使われるので、人間にとって最も恐ろしい武器となる。

〔八十二〕他の武器に囲まれてダイヤモンドで作られた楯が光輝いているが、それは非常に大きくて、アトラス山脈とコーカサス山脈の間に位置する国々とそこに住む人々を覆うことができる。正しい為政者とキリスト教の信仰が根付いた都市は、この楯によって通常守られている。天使はこの楯を手に取ると、それを携えてライモンドの傍に秘かに近寄る。

〔八十三〕そのときエルサレムの町を囲む城壁のところにはすでに多くの見物者が集まっていた。野蛮な王はクロリンダと隊列を組んだ軍団に対して丘の中腹へ進み、それ以上先へは行かないよう指示する。決闘場をはさんで反対側には、キリスト教軍の軍団が数個、やはり隊列を組んで待機している。両軍陣営の間には二人の決闘者のために広い空間が確保されている。

〔八十四〕そこで睨みを利かせているアルガンテは、タンクレーディではなく、見たことがない正体不明の決闘者の姿を認める。伯爵〔ライモンド〕が進み出て言う。「貴様が自分の相手と思っている者は、貴様にとっては不運だが、ここにいない。だが、怒るなかれ。貴様の相手となるべく、この俺が用意を整えて来たのだから。俺がタンクレーディの代役、もしくは三人目の決闘者となってやる。」

〔八十五〕横柄な男はライモンドの弁明を一笑に付し、答える。「タンクレーディはどうした。どこにいるのだ。武器で天を脅かしておきながら、地下の深い所や海の中へ身を隠すのか。俺から逃れる安全な場所があると思うなら大間違いだぞ。」すかさずライモンドが言う。「貴

様こそ間違っている。貴様よりもずっと強い者が、貴様から逃げると思うのか。」

〔八十六〕コーカサスの男は苛立ち、震え、言う。「てめえ、やる気か。奴の代わりにてめえをぶっ殺すぞ。いまぬかした戯言を撤回しようとしてもできないことが、いまに分かるぞ。」両者はこうして馬上試合を始め、ともに相手の兜に強烈な打撃を与えようとした。善きライモンドは狙ったところを打ったが、相手は鞍の上でぐらりともしなかった。

〔八十七〕他方、猛り狂ったアルガンテは（かれにすれば珍しいのだが）決闘場を無駄に走り回った。と言うのも、アルガンテの剣がキリスト教戦士に当たらないように天使が仕組んだからである。残忍な男は怒りに駆られて唇を噛み、罵りながら槍を地面に投げつけ、破壊した。そして剣を抜くと、二回目の攻撃を仕掛けるために物凄い勢いでライモンドに襲いかかった。

〔八十八〕頭を低く擡げて相手に頭突きを試みる雄牛のように、アルガンテの馬はまっすぐに突進した。ライモンドは自らの馬を右に進めて避けたが、相手から離れる際に相手の額に傷を負わせた。エジプト人の騎士は再び突進してきたが、ライモンドは今度も右に動き、そのとき剣で相手の兜を再度打ちつける。しかし兜はダイヤモンドのように堅いので、またしても甲斐なき打撃に終わってしまう。

〔八十九〕荒々しい異教徒の男は相手との距離を縮めようとして、ライモンドの前に飛び込むと、ライモンドに迫った。ライモンドはかくも勢いづいた相手とぶつかった衝撃で馬もろとも自らが地面に叩きつけられることを恐れて、ここは一度後退して、それから攻撃に転じる作戦に出た。相手の周りをあたかも飛ぶように素早く動き、旋回を繰り返しながら攻めた。かれの駿馬は手綱が少しでも引かれると敏感に反応し、その動作に狂いはなかった。

〔九十〕沼の中や高い山の上に聳える塔を攻めようとして、何度も接近を試み、あらゆる戦術や戦法を試そうとする司令官のように、伯爵は慌ただしく動き回った。相手の胸と高慢な頭を包む武具からただの一枚の銅板も剥がすことができないので、相手の武装があまり固くない部分を攻め、銅板と銅板の間に太刀を差し込もうと試みる。

〔九十一〕敵の武具は二、三箇所に穴が開けられ、温かく、赤い血で染まっていたが、かれの武具はまだ無傷で、兜飾りも、他の飾りも打撃を受けていなかった。アルガンテの闘志は空回りし、振り下ろした剣は空を切り、かれの怒りと力は無駄に消費される。しかし疲れるどころか、いっそう激しく斬りかかり、突きで攻め、攻撃が功を奏しないほど力を増す。

〔九十二〕何度も振り下ろされたサラセンの男の太刀が遂に相手を傷つけそうになったまさにその時、伯爵はその太刀のすぐ前にいて、駿馬「北風」と云えどもその太刀を避けることは難しく、危害が伯爵に及びそうになったが、見えない助っ人である天の使者は伯爵の傍らに付き添っていたのであり、片腕を伸ばして、強烈な一撃をダイヤモンド製の神々しい楯で受け止めた。

〔九十三〕刃にひびが入り（地上の鍛冶場で人間によって鍛えられた鋼鉄は、天の職人がさまざまな素材を混ぜることなく造った不滅の武器の威力に耐えることができないので）、その破片が砂の上に飛び散った。コーカサス人は剣の刃が砕（くだ）け飛び、粉々になって落ちるのを見て

まず目を疑い、続いて自らの手から武器が消えたのに敵の決闘者が武器をしかと握っているのを見て驚いた。

〔九十四〕そしてライモンドが身を守るために持っている楯によって剣の刃が破壊されたと信じ、善きライモンドも同じように思い、天から降りて者が誰であるか知る由もなかった。しかし相手が武器を手にしていないのを見て、攻撃に出るのを差し控えた。それによって得られる勝利が、不利な状況にある相手を打ち負かすという不名誉で、卑怯な勝利であると思ったからである。

〔九十五〕「別の武器を取れ」とライモンドは相手に言おうとしたが、そのとき心の中に新たな考えが浮かぶ――もしキリスト教軍を代表して闘う自分が敗れるならば仲間の名誉に傷がつく、不条理な勝利は望むところではないが、全軍の名誉が危険に晒されることも望まない――。ライモンドが対応を決めかねている間に、アルガンテは剣の握りと鍔を敵の顔に投げつける。

〔九十六〕それと同時に自らの馬を鞭打って、取っ組み合いに持ち込もうと相手の前に自分の体を入れる。アルガンテが投げた剣の握りと鍔はトローザの伯爵の兜に当たり、その顔を傷つけたが、ライモンドはまったく動揺せず、アルガンテの太い腕からすぐに離れる。アルガンテは相手を掴もうとして手を伸ばすが、ライモンドは野獣の爪よりも危険なその手に傷を与える。

〔九十七〕そして一方の側から反対の側へ弧を描いて動き、また別の方向へ旋回しながら動く。どこへ移動しても、どこから移動しても、異教徒の男に強烈で、残酷な打撃をつねに与える。もとより持ちあわせている気力と技巧、以前に生まれた怒り、新たに湧き上がった闘志、それらを結集させてコーカサスの男に対抗し、天と運命もライモンドに協力する。

〔九十八〕鍛えられた鋼鉄の鎧で武装し、頑強な武人でもあるアルガンテは、相手の攻撃に屈せず、怯(ひる)むこともない。操舵手を失い、帆もマストも破壊されて、荒海を漂う大型の舟のようにかれは思われたが、その舟は外枠が太い柱でしっかりと支えられているので、傷んだ側面が激しい波を受けてもまだ持ちこたえ、完全に望みを失っているわけでもない。

〔九十九〕アルガンテよ、おまえはそういう危険な状態にあったのだが、その時、ベルゼブがおまえを助ける決心をした。こいつは空なる雲から人間の形をした軽い幻（驚くべき怪物）を創造した。そして凛々しいでたちのクロリンダの面影とかのじょの豪華に煌めく武器を幻に付与し、話す能力、かのじょの特徴ある声、身のこなし、歩き方も与えたが、魂は注ぎ込まなかった。

〔百〕クロリンダの幻は弓の名手であるオラーディンのところへ行くと、こう言った。「おお、名高きオラーディンよ、あなたは狙った的に矢をいつも、思いのままに命中させる方ですが、ユダヤの擁護者である、かの立派な男が、ああ！、このようにして死ぬならば、大きな損失でしょう。かれの相手である男は、あの男の亡骸で身を飾り、無傷のままで自軍の陣営へ戻るでしょう。

〔百一〕さあ、あなたの腕前を試すのです。フランス人の泥棒の血で、あなたの矢を染めるのです。そうすれば不朽の名誉に加えて、尊き王より然るべき褒美が与えられると私は確信します。」このように言うと、オラーディンは幻の言葉に疑念を抱くことなく、直ちに約束につ

いても理解した。重い箙から矢を一本取りだすと、弓にそれをつがえて、弦を張った。

〔百二〕張りつめた弦がシュッと音を立て、放たれた矢は風を切って飛ぶ。ベルトの留め金のところに命中し、それを破壊すると、鎧を貫通し、その部分が少し血で染まったが、体の表面を傷つけただけで、それより深くは刺さらなかった。天の兵士がそれ以上の矢の侵入を阻止し、矢の威力を弱めたのである。

〔百三〕伯爵は鎧から矢を引き抜き、傷口から血が噴き出ているのを見た。脅しと罵りを含んだ言葉で、異教徒の男が決闘の規則を破ったことを非難した。司令官は大切なライモンドを注視していたが、いまや誓約が破られたことを悟り、ライモンドが深刻な傷を負ったと思ったので、心配して溜息をついた。

〔百四〕誇り高き部下の兵士たちに対して、言葉と目くばせの両方で、報復に出よ、と指示を出す。見るがよい、兵士たちが直ちに面頬を下ろし、馬の手綱をゆるめ、槍の柄を槍当てに置くのを。ほとんど時を同じにして、あちらからも、こちらからも幾つかの集団がなだれ込んでくる。もはや決闘場は姿を消し、そこには細かな砂ぼこりが立ちこめ、太い渦巻となって空へ上昇していく。

〔百五〕最初の激突では凄い音が周囲に響き渡る、兜や楯がぶつかり合い、槍が折れる音だ。あちらに倒れた馬がいる、あちらの馬は御者を失い行くあてもなく彷徨っている。ここには息絶えた兵士が、そして虫の息の者が、泣きわめく者、叫ぶ者、観念した者もいる。合戦は凄まじく、両軍が混ざりあい、互いに肉薄するほど、残酷さと、悲惨さが増す。

〔百六〕密集の中心に飛び込むべくアルガンテが猛然と突進し、ひとりの兵士から鉄棒を奪い取る。ひしめき合う兵士たちをかき分けながら、鉄棒を振り回し、自らの進路を確保する。かれはライモンドだけを探し、ライモンドだけにその剣、激しい闘志、狂気を向け、空腹をライモンドの臓器で満たそうとしている貪欲な狼のようである。

〔百七〕しかしアルガンテの進撃はキリスト教軍兵士達の粘り強く、激しい抵抗を受けて減速する。バルナヴィッラのルッジェーロ、グイード、二人のゲラルディらが抗戦に出たのだ。アルガンテは怯まず、その勢いも衰えず、勇気ある敵兵から攻撃されると怒りをいっそう露わにする。その様は、何かの作用を受けて外へ噴き出し、大災害を生む密室の炎のごとし。

〔百八〕オルマンノを殺し、グイードを負傷させ、死者の中にルッジェーロを投げ倒して、痛ましい傷を与える。だがアルガンテに立ち向かう者は増え、人と武器が激しく突き入るようにかれを取り囲む。形勢はアルガンテの武勇ゆえにどちらに有利とも言い難かったが、善き司令官ブリオーネは弟のバルドヴィーノを呼んで言う、「おまえの部隊を向かわせろ、

〔百九〕おまえもあの最大の激戦地に行って、敵軍を左側から攻めるのだ。」バルドヴィーノは行動に移ったが、その部隊に側面から攻撃を受けたアジアの軍勢たるや、戦意を失い、弱体化した集団としか思われず、フランク人兵士たちに攻め込まれると編隊の分散を余儀なくされ、馬とともにかれらとその軍旗も地面に叩きつけられた。

〔百十〕バルドヴィーノらは右側にいたイスラムの軍勢も敗走させた。抗戦を試みたのはアルガンテを除くと誰一人としておらず、皆が恐れ

をなして慌ててちりぢりに逃げた。アルガンテだけは仁王立ちして、敵の方に顔を向けていたが、百の腕と百の手で五十の楯と五十の剣を扱う者がイスラム側にいたとしても、いまやアルガンテを凌ぐ働きはできなかっただろう。

〔百十一〕剣や棒や槍の攻撃に耐え、迫りくる馬を押し返した。敵に対抗するのに助っ人は要らぬと言わんばかりに、目前の敵を相手にすると、次の瞬間には背後の敵に襲いかかった。手足は傷だらけで、武具は裂けて綻び、体から汗と血が流れ出ていたが、それに気をとめる様子もなかった。だが、兵士の集団が一人の男を圧迫し、追い詰めて、圧倒し、巻きこんでいく。

〔百十二〕自らを捕え、引きずっていく洪水の力強い勢いにアルガンテは背中を向けた。だが、手の動きで〔手に命令を与える〕心が推察されるとすれば、かれの足取りと心は逃げる人のものではなかった。かれの両眼には怒りが依然として含まれ、それらは見る者を恐れさせ、怯えさせた。かれは逃げ回る味方の軍勢を何とかして引き留めようとしたが、そのために有効な方法はなかった。

〔百十三〕自軍の敗走をせめて減速させ、集団で退却させるという雄々しい試みも、兵士たちの恐怖を巧みに取り除き、兵士たちを指示と命令に従わせるための策をかれが持たなかったので、功を奏しなかった。敬虔なるブリオーネは自らに運が向いてきて、思い通りにすべてが運んでいるのを見たので、敵を追撃する頼もしき部隊の後を自ら追い、他の自軍兵士たちを援軍として送り込んだ。

〔百十四〕神が永遠の法令の中で定め給うた特別の日ではないと、この日が断言されることがなかったなら、まさにこの日、無敵の軍勢〔キリスト教軍〕は聖なる使命を遂に果たしていたかもしれない。しかし自らのエルサレム支配がこの戦いによって終わることを予想していた地獄の軍勢は、かれらに与えられていた特権を利用して、瞬く間に大気を雲の中に押し込めて、風を引き起こした。

〔百十五〕暗い雲が陽光と太陽を人々の視界から隠し、空は稲妻と輝きと相まって炎を発し、黒く燃えているようで、その不気味さは地獄の恐怖にも勝るほどであった。雷鳴が轟き、氷の中に含まれた雨が降り、畑を荒廃させ、野を水浸しにする。大きな竜巻が木々の枝をへし折り、木々のみならず、岩や丘までもが動くように思われる。

〔百十六〕その時突如、雨と風と嵐がフランク人たちの目を激しく打ち、あまりにも急な攻撃に晒されたかれらは、それが何かの啓示であると思ったかのように立ち止まる。かれらの一部は軍旗のところに集まって（嵐で軍旗は見えなかったが）待った。だが、クロリンダはそこから少し離れた場所にいたので、これを好機と捉え、馬を走らせる。

〔百十七〕かのじょは自軍の兵士たちに叫んだ、「仲間たちよ、天よ、われらに加勢し、正義を擁護し給え。天の怒り〔雨、風、嵐〕はわれらの顔を打ってはいない。われらの右手は天の怒りを買っていないのだ。天の怒りは敵軍の顔にのみ向けられている。そのため敵は怖れ、戦意と視界を失っている。ならば攻め込もうではないか、運命の導きのままに。」

〔百十八〕こうしてイスラム軍兵士たちを鼓舞し、地獄が引き起こした嵐の影響を肩にしか受けることがないかのじょは、フランス軍に襲いかかって合戦を交え、〔嵐に目を攻撃されて〕闇雲に武器を振り回す相手の攻撃を軽くかわした。そのときアルガンテも後ろを振り向き、

先程まで優勢であった相手に残酷な打撃を与える。キリスト教軍は戦いと嵐から逃れるため、必死で撤収を始めた。

〔百十九〕不死なる天の怒りと死すべき人間の剣とが逃げる者たちの背中を攻め立てる。血が流れ、それは大雨で作られた小川の水と混ざって、道を赤く染める。息絶えた人々や瀕死の人々が横たわるその場所で、ピッロとリドルフォが倒れる。前者はコーカサスの残忍な男に命を奪われ、後者はクロリンダに輝かしい勝利を与えた。

〔百二十〕フランク人たちはこうして敗走したが、回教徒たちも悪魔たちも、追撃の手を緩めなかった。ゴッフレードは敵の武力攻撃に対しても、ひょうや暴風や雷の脅威に対しても、ただ一人悠然と構え、自軍武将たちを厳しく叱責し、陣営の入口に自らの馬を止めて戻ってきた兵士たちを中に入れていた。

〔百二十一〕二度かれは荒武者アルガンテに対して攻撃を仕掛け、アルガンテを後退させた。そして敵軍が最も群れているところに同じ回数、剣を抜いて斬り込んでいった。最後には他の者たちと共に幕営の中に引き下がり、敗者に甘んじた。サラセン人たちはようやく戻って行き、疲れ、恐怖から覚めないフランク人たちも、幕営の中へ入った。

〔百二十二〕だが、そこも恐るべき嵐の威力と怒りとから完全に逃れることができる場所ではなかった。松明の火はこちらでも、あちらでも消えたが、水はあらゆるところから入り、風も吹き荒れた。幕を剥がし、支柱を折り、テント全体を持ちあげて、旋回させながら遠くへ吹き飛ばした。雨の音が人の叫びや風の音や雷鳴と相まって聞くに耐えない音を作り出し、人々を悩ませた。

## 註

一　今回訳出した第七歌は六つの部分に分けられよう。すなわち第一節から二十二節六行目迄、二十二節七行目から四十九節迄、五十節から五十六節迄、五十七節から七十二節迄、七十三節から九十八節迄、九十九節から百二十二節迄である。

二　エジプトの首都としてここでは語られている（実際には第一次十字軍の時代、エジプトの首都はカイロであった）。

三　木に愛する人の名前を彫り刻むという行為は十六世紀前半のアリオスト『狂乱のオルランド』（第十九歌三十六節）など、古今のさまざまな作品に先例がある。

四　第六歌五十三節を参照。

五　ゴッフレードの叔父であり、キリスト教軍が征服したアンティオーキア国の王。

六　『神曲』地獄篇第三歌八十五行目でカロンが魂たちに向かって叫ぶ台詞を下敷きとした表現。

七　第五歌七十五節を参照。

八　アルガンテとの決闘の疲れが残っていた（第六歌）

九　第五歌二十六～三十一節を参照。

十　イスラム世界を指してバビロンの帝国と言っている。

十一　ライモンドが語るこの若き日の自らの武勇談は歴史的根拠を欠くとされる。

十二　バットロ川はペルシャにあり、東の地の果てを示す。ティーレ島はアイルランドを指しているとされ、北の果てを示す。

十三　『サムエルの記上』十七にあるダヴィデがゴリアテを倒した話を引いている。